

学部22回 中村一ニ

私は淡水会の集まりでは、いつも「学部21回入学、22回卒業の中村です。」と、半ば自嘲気味に自己紹介します。恐らく、ほとんどの人は少し遊びが過ぎて単位不足のため、5年かかったと思つていることでしょう。

大学では浪人して入ってくる人や、留年して卒業する人など年齢差も珍しいことはありません。また、留年する理由も人それぞれですが、全く部活動（陸上競技）のためにだけに留年した者はそんなに多くないと思います。（決して自慢できることがないが、5年目は2単位だけ残し、卒論も4年で終了する計画留年であった）

これ程陸上競技に没頭していたのであるが、今から思えば両親の反対も押し切り、ゼミの加地先生の説得にも耳を貸さず勝手なことをしたものである。

2回生の時にメキシコ五輪があり、次のミンヘン五輪は社会人1年目である。一つの

種目で特別才能に恵まれていた訳ではな^いが、総合力で勝負する十種競技が自分の能力に合^はつたりはま^つっていた。本気でオリンピックを目指した訳ではな^いが、感^わか^いさせる大きな理由は4回生の関西インカレで1年下の萬谷君と2人で1位・2位を独占したことであ^る。神戸商大は2部であったが、得点競技なの^で、1部の中でも3位・4位の成績であっ^た。大学から本格的に陸上競技を始めた者とし^こはよくや^つたと思^はっている。

ただ、5回生はウェイトトレーニングのや^り過ぎ^でとオーバーワーク^で膝に故障が発生し、厳しい戦^{いんせん}にな^つた。されども関西インカレは大会記録で2位を取^つった。(50年後の今も県大記録として残^つて^{いる}。)

当時、授業料は月千円の時代^{だい}で留年に^よる経済的負担は全くなく、悠々と学生生活を謳歌^{うかく}して^{いた}。しかし、少し後ろめた^い罪悪感のよう^なるものを感じ^ていたのも事実^で、その後の人生に少なからず影響^{えいきょう}を与えたと思^う。

就職活動でH製作所やK製錫所を訪問した時、留年の理由をしつこく聞かれ、正直に答えたのであるが理解されず不穏な空気で席を立つたりもした。その時自分は企業組織では働けない、いや働かないと決意した。（陸上閨僚の人がら入社の打診があったりもしたが、一般面接で受けこなした。）

もちろん、当時の社会情勢では生き残りの起業も難しいので、取りあえずA組という建設会社に就職することにした。

しかし、3年後に当時高商の先輩が社長をしでいた山陽カンツリー俱楽部に移り、昭和53年から全くの個人企業として学習塾を立ち上げ、以来42年間現在も細々と続けてる。（神戸商大経営学科卒としては全く経営的センスがなく、日々飯の種として塾を続けてる。）

完全存一匹狼として生きてきたと言えば、聞こえはいいが、72歳の今も働かなければならぬ頗りない経済状況も事実である。

最近で二をなくなったが40歳頃まではよく履習単位の計算をまちがえ?もう1年留年する破目に存る夢を見たものである。

留年したことの影響は、功罪相半ばしてくる。昔のような年功序列ならば完全に一歩出遅れたことになるが、人生で最も楽しい学生時代を5年過ごすことができたのは何よりの収穫であり、結果として世の中を高め・大所から見ることができたので、よかったですと思ふ

